

第7回 熊野川懇談会

会議資料 4

「(仮称)流域のまとめ」について

1. 作成に至る経緯について

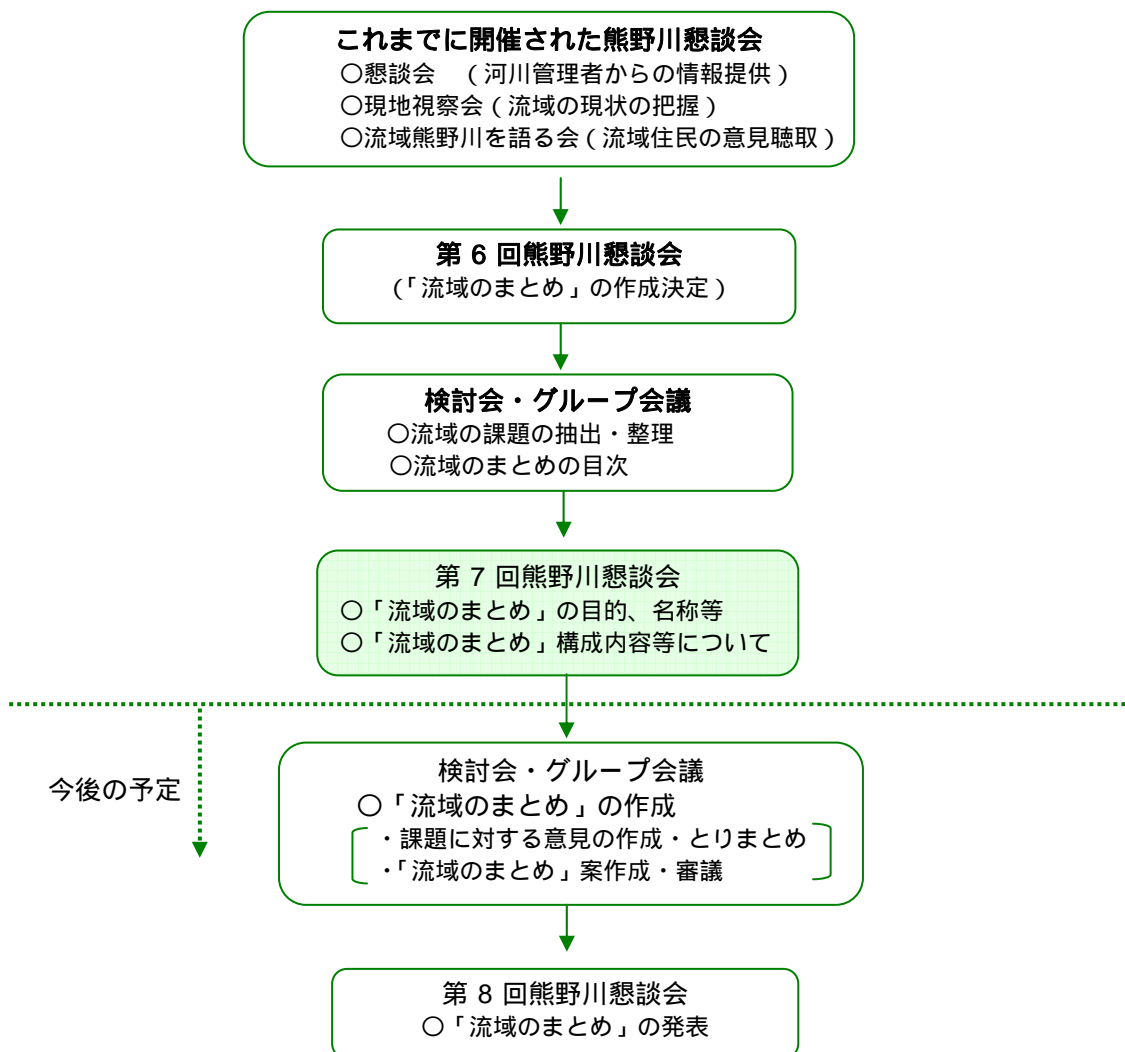
10月7日に開催された第6回懇談会において、「直轄区間の審議に入る前に、流域全体の視点から熊野川流域が抱えるさまざまな課題に対する専門家としての見解をとりまとめる必要があるのではないか」との意見が提案され、これを踏まえて「(仮称)流域のまとめ」(以下「流域のまとめ」とする)を作成すること、そしてその審議の場として、検討会および分野別のグループ会議を設けることが決定されました。

これに従い、熊野川懇談会においては第6回懇談会以降、検討会やグループ会議を開催し、流域の抱える問題点や課題について審議を行うとともに、「流域のまとめ」の構成に関する審議を重ねて参りました。

今回の懇談会では、これまで検討会等で審議された内容を踏まえ、「流域のまとめ」の構成内容について確認作業を行うとともに、今後のとりまとめに当たりどのような視点に立って意見を述べるかについて審議を行うこととなります。

今後は、今回確認された構成内容に従い、各課題に対する意見のとりまとめを行う予定です。

< 「流域のまとめ」作成までの流れ >



2. 「流域のまとめ」の目的について

今後懇談会において「流域のまとめ」の作成にあたり、「流域のまとめ」の目的（位置づけ）について明確にしておく必要があります。

「流域のまとめ」の目的（位置づけ）(案)

河川整備計画に対する懇談会からの意見の基本的な方向性を示す。

河川管理者や市町村が、今後熊野川の整備や活用、自然環境の保全等を行う際に直面するであろう課題に対して、問題解決の一助となるよう、専門家の立場から意見を述べ、その方向性を示す。

流域住民が熊野川とかかわる際の熊野川の情報を提供する。

3. 「流域のまとめ」の構成について

(1) 「流域のまとめ」の目次について

「流域のまとめ」の目次は以下のとおりです。

- . はじめに
- . 熊野川流域の概要
- . 流域の現状と課題
 - 1. 治水の現状と課題
 - 1.1 現状
 - 1.2 課題
 - 2. 利用・利水の現状と課題
 - 2.1 現状
 - 2.2 課題
 - 3. 自然環境の現状と課題
 - 3.1 現状
 - 3.2 課題
 - 4. 社会環境の現状と課題
 - 4.1 現状
 - 4.2 課題
- . 整備計画の策定に向けて
- . まとめ

(2)「(仮称)流域のまとめ」の各章の内容について

・はじめに

○前書き文章を記載する

- ・ 「(仮称)流域のまとめ」作成に至る経緯と目的
- ・ 地域住民の誇りでもある熊野川のあるべき姿について
- ・ 熊野川のあるべき姿を示すキャッチフレーズ等

・熊野川流域の概要

○熊野川流域の概要、特性を示す。

- ・ 地形、地質、自然環境（気象、森林面積・生態系、動物など）、水文、人口、産業、歴史・文化、土地利用等

・流域の現状と課題

1. 治水の現状と課題

1.1 現状

(1) 降雨と流出の特性

- ・ 熊野川流域の降雨と流出の特性を纏める。
(非常に多い降水量。降水量の季節、空間分布。それが流出特性にどのような影響を及ぼすか。特に、降水量、洪水流量の統計的特性がどのようなものであるか。2日降雨量の極値解析、河川流量観測地の極値解析の結果を示す。)

(2) 電力ダム群

- ・ 電力ダム群の存在、運用が洪水流出にどのような効果をもたらしているか。

(3) 災害

- ・ 山腹崩壊、土石流
山腹崩壊、土石流災害の現状。
- ・ 地震・津波災害
南海・東南海地震の予測の現状とそれが、熊野川流域、とくに河口部分、海岸地域にどのような影響をもっているか。

(4) 河床変動と海岸侵食

- ・ 河床変動と海岸侵食の歴史的経緯、現状。

(5) 河川施設の整備、河川管理の整備

- ・ 現行河川施設の整備状況。
- ・ 土地利用。ハザードマップの整備状況。

1.2 課題

(1) 目標流量の設定

- ・洪水流量の観測値の極値解析の結果と現行の計画高水流量の分析に基づいて、河川整備を考える。

(2) 段階整備。

- ・今後30年程度の中で、どの規模の河川流量を目標流量として設定していくべきか、利水ダムの活用を織りこむことを考える。

(3) ダム貯水池群の運用の基本的考え方

- ・利水ダムの治水への活用の効果を分析し、利水ダムの治水への活用を折り込んだ方式を今後20～30年の洪水対応方式と位置付ける。

(4) 浸水被害の軽減のために

ソフト対策

- ・熊野川流域のための洪水予測モデルの作成。
- ・河川管理機関、ダム管理機関の情報共有体制の構築。
- ・観測体制の整備。

ハード対策

- ・重点整備箇所、洪水災害頻発地区の治水対策。
- ・既存堤防の質的強化を図る。
- ・洪水、地震・津波、高潮発生に対応可能な施設の整備を図る。
- ・災害時に孤立しがちな地域に対する避難等必要となる施設の拡充を図る。
- ・密集市街地の面的整備や内水排水対策を推進する。

(5) 流砂河床変動、海岸侵食

- ・流砂環境に関する理念の構築。
(熊野川における望ましい流砂環境はどのようなものであるか。)
- ・流砂環境の評価と復元。
- ・流域全体を視野に入れた土砂流出の抑制。
- ・川の道、観光舟運等の河川利用を維持しながら、河川の自然的機能を発揮し、治水上の課題を阻害しないような河川の縦横断形状と流砂の移動性の維持管理を考える。
- ・流砂状況把握のための河口砂州の定点観測。
- ・相野谷川の堆積土砂対策。
- ・河口大橋による砂州への影響確認。

(6) 地震・津波にそなえる

- ・津波被害軽減対策の立案・実施。緊急避難場所の確保。

(7) 流域全体で連携した河川整備とソフト対策

- ・分割された体制を補う協議会の設置。

2. 利用・利水の現状と課題

2.1 現状

(1) 熊野川水系の水資源賦存量

- ・豊富な流量
- ・森林の貯留機能

(2) 熊野川の河川利用率

- ・低い利用率？
- ・利用率に対する発電の関与
- ・河状係数にみる流出特性

(3) 各種利水

- ・利水者、利水量一覧
- ・各種利水施設と維持管理組織、ならびに料金体系
- ・熊野川利水の特色

2.2 課題

(1) 都市用水

- ・流域人口と取水量の動向

(2) 農業用水

- ・農地面積と取水量の動向

(3) 発電用水

- ・発電運営の動向
- ・観光舟運への放流

(4) 観光舟運用水

- ・舟運維持河川流量

(5) 観光舟運用水

3. 自然環境の現状と課題

3.1 現状

- (1) 水量と水質および濁水
- (2) 人工林の荒廃
- (3) 流砂と河床形状および河口砂州
- (4) 流域の生物

3.2 課題

- (1) 瀬切れによる魚類等への影響
 - ・ 渇水期におけるダム放水量の維持
- (2) 濁水の長期化・発生源対策
 - ・ ダム管理
 - ・ 人工林の適正管理
- (3) 水質の劣化(大腸菌対策)・下水道整備
 - ・ 家庭雑排水処理についての意識啓蒙
 - ・ 合併浄化槽の普及・下水道整備の推進
- (4) 河川景観(流砂と河川形状および河川敷と河岸の植生管理)
 - ・ 自然と調和する景観づくり
 - ・ 堆積土砂とツルヨシの除去(相野谷川)
- (5) 生息生物(植物・魚類)の把握と外来魚対策
 - ・ 流域全体の生息生物の把握
 - ・ オオクチバス対策(駆除と食性調査、漁協・ダム管理者との連携)
- (6) 地域特性を活かした多自然川づくりの推進
 - ・ 生息生物に配慮した川づくり
 - ・ 学習の場としての川の活用

4. 社会環境の現状と課題（地域振興）

4.1 現状

(1) 地域振興

流域の農林業の衰退と農林地の荒廃
過疎化・高齢化の進行
川と流域住民の交流の希薄化
観光資源としての川の未利用（低利用）
観光業等の地域間連携の弱さ

4.2 課題

(1) 地域振興

農林業の活性化と農林地の活用
・ 棚田の活用と不耕作地の解消
・ 林業振興
・ 農林業の多面的機能・役割の活用
高齢者の活用とIターン・Uターンの推進
・ 高齢者の活用
・ 交流人口の増大
・ 移住・定住の促進
流域ネットワークの形成
・ 流域住民の交流・連携の推進
・ 川をテーマにした各種イベントの共同開催
リバーツーリズムの開発
・ 川を新しい観光資源として活かす
観光産業クラスターの形成
・ 流域内の観光産業の連携
・ 流域観光の核づくり

4. 社会環境の現状と課題（歴史文化・景観）

4.1 現状

(2) 歴史文化

熊野文化と遺産への無関心
伝承文化の断絶
総合的調査の欠如
顕彰・PRの不足
ふさわしい川づくりへの反省

(3) 景観

人口構造物の景観障害
濁水でのイメージダウン
人工林の増加
ダムによる景観ダメージ
ゴミの散乱

4.2 課題

(2) 歴史文化

歴史と伝承の調査
・ 歴史の変遷の調査
・ 伝承文化の調査
歴史文化の継承方策
・ 伝統文化を語る座談会や講演会の開催
・ 語り部の養成
資産の保全と復元
・ 流域交通遺跡の保全
・ 歴史的交通路や遺構の復活・復元
・ 川船・筏・プロペラ船の復元
魅力発信の手だて
・ 啓発冊子の発行
・ 熊野川資料館の建設
・ 熊野川賛歌の制作
ふさわしい川づくりの空間創出
・ 歴史文化を踏まえたハード整備
・ 景観を重視した空間形成
川に親しむ住民意識の向上
・ 川とともに生きてきた生活文化の重視
・ 川の文化継承の住民ネットワーク

(3) 景観

人工構造物の景観整備

- ・ 不用構造物の撤去
- ・ 景観とマッチする工夫

新施設への景観配慮

- ・ デザイン上の工夫
- ・ 色彩への配慮

自然林の保全と復元

- ・ 自然林・人工林の分布
- ・ 自然林の樹種の選定

景観デザインの統一

- ・ 人口構造物の調査
- ・ 景観形成の統一化

世界遺産にふさわしい景観形成

- ・ ゴミなどの撤去
- ・ 文化的景観の重視
- ・ 官民一体の努力

・ 整備計画の策定に向けて

・ まとめ

4. 熊野川のあり方を示すキャッチフレーズについて

現在、以下のキャッチフレーズが提案されています。

「満緑の三県映えて熊野川」

親しみやすく古い歴史観念にとらわれなくて広大な自然を一步前進したイメージにしました。

「山の国 川の国 熊野」

まず紀伊半島という独立圏を『国』で表現。次に小中の地理？教科書では日本は“山国”との表現が多いが、それはそれで、その通り。ましてや紀伊半島は山岳地域。しかしモンスーン気候の“山国”日本は、また大小無数の河川が走る。とりわけ熊野川は自然豊かな河川であり(ダムがなければ)悠久の歴史の象徴でもある(“悠久の歴史”は河川沿いの看板で見た気がする)。ところが“川の国”は当たり前すぎて、これまで誰もキャッチにできなかった。そこで上記のキャッチフレーズとしました。

「熊野の川のせせらぎに聴く歴史・未来」

河川整備計画にあたり、自然災害の克服を単に目指すだけでなく、人と自然が共生することが重要である。そのため、「自然を良く知り自然との調和を図るため自然の声を聞く」このことを「熊野川のせせらぎに聴く」としました。なお、意識的に「聞く」のではなく、感覚的に体に入ってくる「聴く」にしました。最初「過去・未来」の反対語にしようと思いましたが、事実としての「過去」より、自然や人間の生活史を含むような「歴史」にしました。従いまして私のイメージは、「これまでの歴史とこれからの将来を考慮した自然と共生する河川計画である」というものです。

「世界遺産の熊野川

美しい熊野川

交流と連携の熊野川」

川では世界遺産唯一・日本文化源流の意味を含めて

「神々の交流の地

自然と文化の熊野川」

日本人は長い歴史の中で、私共を育ててきた日本の風土と民族の御先祖を尊んで来ました。その真髄が日本の神々であり、神々の故郷が熊野であります。建国の日(2月11日)といわれる神武帝が大和の橿原に都を建てる前に上陸したのが熊野であります。以来、熊野には大和民族の祖神を祀れる地として全国から人々が熊野詣として参詣に来られました。

神々を祀られる熊野三山(本宮、新宮、那智)の交流の川が熊野川であります。そして、この熊野川は美しい大自然の中に日本の長い歴史と文化が刻まれております。

「神々の交流の地、そして自然と(長い歴史の)文化の熊野川」であります。

「癒しと活力の源、聖なる熊野川」

会議で例示されたキャッチコピーがいずれも、癒し系、静的に感じられたので、熊野川が日本に貢献している重要な機能である水力発電、そして、木材産業、観光産業、等、更には、今後の地場産業発展の活力源となる期待を込めて考案した。

「ふれあいの文化たたえる熊野川」

古くから熊野川の文化(自然や歴史、民族伝承)とふれあい親しんできた流域の人々。「文化をたたえる」は湛える(いっぱいにする)と称える(賞賛する)にかけています。

5. 「(仮称)流域のまとめ」の名称について

現在仮称であるこの「流域のまとめ」に正式な名称を付ける必要があります。

< 名称案 >

「熊野川河川整備計画の策定に向けて」

「明日の熊野川の整備のあり方」

「熊野川の明日を考える」

「未来の熊野川のために」

「熊野川を未来に引き継ぐために」

「自然と歴史に満ち溢れた熊野川を守るために」